チベット仏教における「道次第（Lam rim）」と「教説次第（bsTan rim）」文献について

更　藏　切　主

1．問題の所在

後伝期チベット仏教における根本思想は、悟りに向かう修行の諸段階を体系的にまとめた「道次第（lam rim）」思想であると言える。この「道次第」の思想をチベットにもたらしたのは、インドのヴィクラマシーラ大僧院の僧院長で、1040年頃に入蔵したアティシャ（982-1054）である。彼がガリ王に仏教を講義するために執筆した『菩提道灯論（*Bodhipatha-pradīpa*）』は、「道次第」思想の原典となっている。「道次第」は、仏説全てを、悟り（仏陀の境地）に向かう修行道の諸段階として位置付けることを目的とし、修行者を、仏教に目覚めた在家の「小士（skyes bu chung ngu）、出家して僧院に入った修行僧の「中士（skyes bu ’bring ba）」、菩提心を起こして菩薩行を行う「大士（skyes bu chen po）」の三種類に分けることを特徴としている。この教えは、アティシャの後継者たちによって確立されたカダム派において受け継がれ、その後ゲルク派の開祖であるツォンカパ（tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419）の最初の主著である『菩提道次第大論（*lam rim chen mo*）』によって完成された。今日、「道次第」の思想は、ツォンカパのこの『菩提道次第大論』に基づいて理解されている。

一方、アティシャの入蔵に同行したナクツォ翻訳師（nag ’tsho lo ts’a ba, 1011-1064）と、アティシャの弟子ゴク・ロデンシェーラプ（rngog blo ldan shes rab, 1056-1109）には、「教説次第（bstan rim）」と言われる著作があったとされる。それらは現在散逸してしまったが、ゴクの弟子であるドルンパ・ロドゥージュンネー「（gro lung pa blo gros ’byung gnas, 11世紀半ばから12世紀前半）以下ドルンパと略する」の大著『教説次第大論（*bde bar gshegs pa’i bstan pa rin po che la ’jug pa’i lam gyi*

rim pa rnam par bshad pa「善逝の宝なる教説に入るための道の次第の解説」)』が現存しており、「教説次第」の思想を詳細に知ることができる。この『教説次第大論』が、後にツォンカパの『菩提道次第大論』に大きな影響を与えたことが、この文献が散逸せずに伝えられた理由の一つであろう。[1]

それでは、「道次第」と「教説次第」の思想的な違いは何であろうか。「道次第」と「教説次第」という用語はツォンカパ以前のカダム派では、同義語として使われていたと考えられる。[2]

この「道次第」の思想が成立したのは、アティシャの教えを基に成立したカダム派においてであったが、その後に成立するサキャ派やカギュ派も、顕教を学ぶためにカダム派の僧院に行くことが多かったので、この「道次第」の思想は、その後のチベット仏教に大きな影響を与えることになった。例えば、カギュ派の開祖であるガムポパ（sgam po pa bsod nams rin chen, 1079–1153）はその上師のミラレパと出遇う前に、カダム派の僧院で出家し、カダム派の諸師にその伝統を学んだ。[3]彼の『解脱荘厳』はカダム派の道次第とミラレパから伝えられた大印（mahāmudrā）の教えを統合した書物として知られている。ガムポパの弟子であるパクモドゥパ（phag mo gru pa rdo rje rgyal po, 1110–1170）もガムポパと出遇う前にカダム派のトルパ（dol pa shes rab rgya mtsho, 1059–1131）やサンプ僧院のチャパ（phya pa chos kyi seng ge, 1109–1169）などの下においてカダム派の諸法を学んだ。[4]その後、ガムポパに師事してカギュ派に転向した。彼には、『仏説入門（*sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis 'jug pa'i tshul*「仏陀の教説に次第を〔踏んで〕入る仕方」)』という「教説次第」の著作が残されている。本稿で後に取り上げる『牟尼の密意解明（*thub pa'i dgongs pa rab gsal*)』を著したサキャ派第五代座主サキャ・パンディタ＝クンガ・ギェルツェン（sa skya paṇḍi ta kun dga' rgyal mtshan, 1182–

1251、以下サキャ・パンディタと略する）もカダム派の僧院を訪ね、その教えを受けた。[5] サキャ・パンディタの『牟尼の密意解明』は菩薩の道の次第を説くものと高く評価されている。[6]

Jackson（1996）は、「道次第」および「教説次第」は広い意味での「道次第」の下位分類と考えられ、ドルンパの『教説次第大論』が「教説次第」の代表的な著作であり、他に上述したガムポパの『解脱荘厳』、パクモドゥパの『仏説入門』、サキャ・パンディタの『牟尼の密意解明』がそれに連なるものと解釈している。更藏切主（2019）では、ドルンパの『教説次第大論』は、現時点では最も古い「教説次第」文献であり、ツォンカパの『菩提道次第大論』の素材となったことを示した。『菩提道次第大論』が三士（skyes bu gsum）の構成を取っていることを除き、これら二書における道次第の構造、すなわち悟りに向かう修行の諸段階の配置は、ほぼ一致している。ドルンパの『教説次第大論』はカダム派の歴史の早い時期に成立したのに対し、ツォンカパの『菩提道次第大論』はカダム派からゲルク派へと学問仏教の中心が変わって行くきっかけとなった著作である。この新旧の二書がほぼ同じ構成になっているということは、「道次第」の思想が、『教説次第大論』の時期にすでに詳細な点まで出来上がっていたことを示している。また『教説次第大論』に三士の区別が説かれていないということから、これが「道次第」の思想にとって必須の要素ではなかったことが分かる。

本稿では、まず「道次第」および「教説次第」の意味について様々な議論があったのは、ツォンカパの『菩提道次第大論』が成立した後の15世紀後半に書かれた歴史書のみであったことを指摘し、それ以外では「道次第」と「教説次第」は区別されていなかったことを示す。次いで、Jackson（1996）が「教説次第」文献として取り上げたガムポパの『解脱荘厳』、パクモドゥパの『仏説入門』、サキャ・パンディタの『牟尼の密意解明』

について、その梗概をドルンパの『教説次第大論』と比較し、『仏説入門』では「教説次第」が説かれているが、他の著作を「教説次第」と位置付けるのは不適切であることを示したい。

本稿で取り上げる資料をまとめると以下の表の通りである。

著者名	年　代	著　作	宗　派
ドルンパ・ロドゥージュンネー（gro lung pa blo gros ’byung gnas）	（11世紀半ばから12世紀前半）	『教説次第大論（*bstan rim chen mo*）』	カダム派
ガムポパ（sgam po pa bsod nams rin chen）	（1079–1153）	『解脱荘厳（*thar pa rin po che’i rgyan*）』	カギュ派
パクモドゥパ（phag mo gru pa rdo rje rgyal bo）	（1110–1170）	『仏説入門（*sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis ’jug pa’i tshul*）』	カギュ派
サキャ・パンディタ（sa skya paṇḍi ta kun dga’ rgyal mtshan）	（1182–1251）	『牟尼の密意解明（*thub pa’i dgongs pa rab tu gsal ba*）』	サキャ派

2.「道次第」と「教説次第」

カダム派の古い歴史書として、15世紀後半に書かれたソナム・ヘーワンポ（bsod nams lha’i dbang po, 1423–1496）著『カダム陽光史』とクンガーギェルツェン（las chen kun dga’ rgyal mtshan, 1432–1506）著『カダム明灯史』が知られている。更藏切主（2019）では、これらの歴史書に、「道次第」と「教説次第」という言葉の意味に関して様々な説があったことが報告されていること、およびその分析から「道次第」と「教説次第」の伝承方法に相違があった可能性があることを指摘した。(7)

更藏切主（2019）で指摘したように、「教説次第」の代表作であるドルンパの『教説次第大論』と「道次第」の完成形であるツォンカパの『菩提

道次第大論』とは、その構成が極めて類似しており、ツォンカパ自身が「道次第」としてのドルンパの著作を高く評価していた。[8] また『カダム明灯史』と『カダム陽光史』を除き、15世紀の以前と以降における仏教史書においては、「道次第」と「教説次第」の違いについての議論が全く見られない。[9]

以上のことから「道次第」と「教説次第」に関する異説の報告は、15世紀後半に成立した上記の二つの歴史書に限られていることが分かる。上記二書は同年代の著作であり、著者は相互に先輩・後輩の関係にあり、かつ『カダム明灯史』は、名指しはしないものの『カダム陽光史』の記述を挙げて批判している箇所もあり、また影響関係もあるので、「道次第」と「教説次第」についての議論は、この二書の特殊な性格に由来するのではないかと思われる。少なくとも、前後の時代を通じて、それらが区別されていたと考えられる典拠は見つからない。

前述のように、「道次第」と「教説次第」の伝承方法に相違があったとしても、原典となる『菩提道灯論』を「集会の中で説かれたならば教説の次第であり、それを〔解脱を求めるある人が〕実践し修習したならば道の次第である」と、同じ『菩提道灯論』の伝承の仕方の違いで区別されていることから、[10] 逆にそれらは思想としては区別されていないことを示唆している。

それでは、本稿で取り上げる諸文献では悟りへの道の次第はどのように描かれているのだろうか。以下、各著作の科段を取り上げ、その科段の構成からこれらの著作における悟りへの道の階梯を確認する。その際、上述のように、著者それぞれによる悟りへの道の説き方があることに注意する必要がある。

3.『教説次第大論』と『仏説入門』

以下、Jackson（1996）で「教説次第」文献として分類されているカギュ派、サキャ派の著作について、『教説次第大論』と比較し、はたしてそれらが「教説次第」と言えるか否かを、大まかな構造や執筆意図などの比較を通じて検討したい[11]。最初に結論を言うならば、パクモドゥパの『仏説入門』は「教説に入る次第」というタイトル、その全体の科段構成から分かるように「教説次第」文献に分類できるが、ガムポパの『解脱荘厳』とサキャ・パンディタの『牟尼の密意解明』は、それぞれ著者独自の視点から仏説の概説をしているので、ドルンパの『教説次第大論』（や、それを受け継ぐツォンカパの『菩提道次第大論』）の説く道次第・教説次第とは異なった種類の文献と考えられる。

まずは『教説次第大論』と、これに構成の似ている『仏説入門』の科段を提示する。

『教説次第大論』の科段

A1 最初の意味（klad kyi don bshad pa）［1b1］

A2 本文の内容（gzhung gi don bshad pa）［4a1］

B1 著作の必要性と関連性（bstan bcos kyi dgos ’brel bshad pa）［4a1］

B2 著作の本質の説明（bstan bcos kyi rang bzhin bshad pa）［5b5］

C1〔著作〕自体の構成（lus rnam par bshag pa）［5b5］

C2〔著作の〕諸部分の詳説（yan lag rgyas par bshad pa）［7b1］

D1 善知識への師事（dge pa’i bshes gnyen bstan pa la ’jug pa）［7b1］

D2 有暇具足の修習（dal ’byor bsgom pa la ’jug pa）［31a7］

D3 死すなわち無常についての修習（’chi ba mi rtag pa la ’jug pa）

［39b7］

・三宝への帰依（skyabs su ’gro ba）

D4 業と果報の修習（las dang ’bras bu bsgom pa la ’jug pa）［49b1］

D5 輪廻の災いの修習（’khor ba’i nyes dmigs bsgom pa la ’jug pa）［130a1］

D6 菩提心の修習（byang chub kyi sems bsgom pa la ’jug pa）［155bb8］

D7 菩薩行の修習（byang chub sems dpa’i spyod pa la ’jug pa）［179b3］

D8 真実義の修習（de kho na bsgom pa la ’jug pa）［292a7］

D9 諸々の菩薩地の修習（byang chub sems dpa’i sa rnams bsgom pa）［323a7］

D10 果である仏地の修習（’bras bu sangs rgyas kyi sa la ’jug pa）［402b6］

A3 終わりの内容（mjug gi don bstan pa）［471a1］

『仏説入門』の科段

A1 最初の意味　［1b1］

B1 帰敬偈

B2 本論の構成

A2 本論　［1b3］

B1 人と信仰心（gang zag dang dad pa）［2b3］

B2 ラマの定義の解説（bla ma’i mtshan nyid bstan pa）［3b6］

B3 有暇具足の得難さ　［8a4］

B4 死を随念し修習すべきこと　［11b1］

B5 輪廻の災いの修習　［14a3］

B6 帰依 ［18a3］

B7 業とその果と別解脱戒（las rgyu ’bras dang so so thar pa’i sdom pa bstan pa）［21a6］

B8 慈悲の修習（byams pa dang snying rje bsgom pa）［25b2］

B9 発菩提心（sems bskyed bstan pa）［30b7］

B10 果である三身の解説（’bras bu sku gsum bstan pa）［45b2］

C1 空性と慈悲双運の修習（stong nyid snying rje dbyer med du bsgom pa）［45b2］

C2 果である三身の獲得（’bras bu sku gsum thob par bstan pa）［47a7］

A3 終わりの内容 ［52a4］

『教説次第大論』では、著作全体が A1 の帰敬偈、A2 本文の構成、A3 終わりの内容の三つから成り立っている。このような構成は本稿で取り扱うほかの文献においてもほぼ同じである。実際の道の階梯 A2 は、D1〜D10 の10項目に分けられる。同じような構成は『仏説入門』でも確認できる。『仏説入門』の本文も B1〜B10 の10項目に分かれている。この10項目は、以下の表に示したように、科段の分け方や順序が『教説次第大論』ときちんと対応しているわけではないが、内容はほぼ対応している。一方、分量的にはかなりの差がある。というのも、『教説次第大論』では、一つの項目を説明する際にインドの経典と論書から多くの典拠が引用され、悟りへの道の説き方に様々な方法があることが示されているが、『仏説入門』では、経典と論書からの引用が、非常に簡潔だからである。

修行階梯	『教説次第大論』	『仏説入門』
善智識への師事	D1	B1，B2
有暇具足の修習	D2	B3
無常の修習	D3	B4，B6
業とその果の修習	D4	B7
輪廻の災いの修習	D5	B5
発菩提心、菩薩行、菩薩地	D6．D9	B8，B9
真実義の修習	D8	B10C1
仏地	D10	B10C2

上記のように両著作で扱われる主題は、善智識への師事から最後の仏地に至るまで一致しているが、その順序には異なる点が見られる。『教説次第大論』におけるD4「業とその果報の修習」、D5「輪廻の災いの修習」の順序は、『仏説入門』では逆になっている。また、帰依は、『教説次第大論』ではD3「死を思う修習」で説かれているが、『仏説入門』では、B5「輪廻の災いの修習」の後の〔B6 帰依〕において説かれている。つまり、『教説次第大論』では、「死を思う修習」、「帰依」、「業とその果報の修習」、「輪廻の災いの修習」の順序になっているのが、『仏説入門』では、「死を思う修習」、「輪廻の災いの修習」、「帰依」、「業とその果報の修習」の順になる。『仏説入門』におけるこのような道の順序は、『解脱荘厳』にも見られるので、この点では、師のガムポパからの影響があるのかもしれない。このように『仏説入門』の科段の構成は『教説次第大論』と最も近いものであるが、その一方で、『解脱荘厳』からの影響も考えられる。以下、カギュ派の開祖であるガムポパの『解脱荘厳』の構成を見てみる。

4.『解脱荘厳』

『解脱荘厳』はカダム派の「道次第」とカギュ派の「大印」の教えを統合した書物と言われている。そうだとすれば、『教説次第大論』に並び、道次第の古い文献と言えるが、それだけではなく、『解脱荘厳』においてはカダム派の「道次第」とカギュ派の「大印」の教えが統合されており、カダム派の道次第には見られない顕教と密教の双修が説かれている点が重要である。ただし、そのことは以下の科段自体には反映されていないので、内容を子細に検討する必要があり、それは今後の課題である。

以下は『解脱荘厳』の科段構成である。

『解脱荘厳』の科段

A1 論書の最初の意味［1b1］

B1 帰敬偈

B2 著作の構成

A2 論書の支分の詳説［2b5］

B1 因としての如来蔵（rgyu bde gshegs snying po）［2b5］

C1 種姓が断じられた種姓（rigs chad kyi rigs）［3b4］

C2 どの種姓かが確定されていない種姓（ma nges pa’i rigs）［4a3］

C3 声聞の種姓（nyan thos kyi rigs）［4a5］

C4 独覚の種姓（rang sangs rgyas kyi rigs）［4a6］

C5 大乗の種姓（theg pa chen po’i rigs）［5b1］

B2 拠り所としての宝の如き人身（rten mi lus rin chen mchog）［6b6］

C1 八つの有暇 ［7a2］

C2 十の具足 ［7b4］

C3 信仰心　［10a2］

B3 縁としての善智識（rkyen dge ba’i bshes gnyen）［11b3］

C1 善知識への師事が必要であることの妥当性　［11b4］

C2 善知識の分類　［13a6］

C3 それぞれの定義　［13b5］

C4 師事する仕方　［15a1］

C5 師事したことによる利益　［15b6］

B4 方法としての善知識の教誨（thabs de yi gdams ngag）［16b2］

C1 無常の修習　［17a3］

C2 輪廻の災いと業とその果の修習　［22b1］

C3 慈悲の修習　［39a5］

C4 菩提への発心の修習　［43b4］

B5 果としての正等覚者（仏陀）の身体（’bras bu rdzogs sangs rgyas sku）［124a5］

C1 仏陀の本質（sangs rgyas kyi rang bzhin）［124b1］

C2 仏陀の語義釈　［127b2］

C3 仏陀の分類　［127b4］

C4 仏陀の設定　［128a1］

C5 仏陀の数の決定　［128b1］

C6 仏陀の定義　［129a1］

C7 仏陀の特質　［130b4］

B6 仏陀の事業（sangs rgyas kyi ’phrin las）［131a3］

C1 身の事業（sku’i ’phrin las）［131b1］

C2 言葉の事業（gsung gi ’phrin las）［132a1］

C3 意の事業（thugs kyi ’phrin las）［132b3］

A3 終わりの内容　［133a6］

『解脱荘厳』における仏説の体系はB1〜B6の6項目に分けられている。この構成は『教説次第大論』とは異なるが、各項目の下位項目の科段は共通のものが多い。このような構造についてガムポパはA1B2「著作の構成」の箇所で以下のように述べている。

spyir chos thams cad ’khor ba dang mya ngan las ’das pa gnyis su ’dus / de la ’khor ba zhes bya ba ni rang bzhin stong pa nyid yin / rnam pa ’khrul pa yin / mtshan nyid sdug bsngal du shar ba yin no //（中略）de la ’khor ba ’khrul pa ’di yang su ’khrul na / khams gsum gyi sems can thams cad ’khrul lo // gzhi ci las ’khrul na / stong pa nyid las ’khrul lo // rgyu ci las ’khrul na / ma rig pa chen pos ’khrul lo // tshul ji ltar ’khrul na / ’gro ba rigs drug gi spyod yul du ’khrul lo // dpe ji ltar ’khrul na gnyid dang rmi lam ltar ’khrul lo // dus nam nas ’khrul na / ’khor ba thog ma med pa nas ’khrul lo // ’khrul pa la skyon ci yod na / sdug bsngal ’ba’ zhig la spyod do // ’khrul pa ye shes su nam ’gyur na / bla med kyi byang chub thob tsa na ’gyur ro // ’khrul pa la rang sangs yod dam snyam na / ’khor ba mtha’ med par grags pa de yin no // de ltar na ’khor ba ’di ’khrul pa yin lugs sam / sdug bsngal che tshod dam / yun gyi ring lugs sam / rang grol med lugs de ltar lags pas / dus de ring nas bzung ste bla med kyi byang chub ci thob la ’bad ’tshal lo //（TG 2b2-2b3）

一般的に一切法は輪廻と涅槃の二つ〔のいづれか〕に含まれる。そのうち、輪廻については、自性は空、形象は迷乱、特徴は苦としての現れである。（中略）そのうち輪廻〔の形象〕が迷乱であることについても、誰が迷乱しているのかと言うならば、三界の全ての有情が迷乱

している。何について迷乱しているのかと言うならば、空性について迷乱している。どのような因によって迷乱しているのかと言うならば、大きな無明によって迷乱している。どのように迷乱しているのかと言うならば、六道〔にいる人の〕活動対象において迷乱している。比喩としては、どのように迷乱しているのかと言うならば、眠りや夢の如くに迷乱している。いつから迷乱しているのかと言うならば、無始時来、迷乱している。迷乱していることには何の災いがあるのかと言うならば、苦しみだけを受用している。その迷乱はいつ智慧（ye shes）になるのかと言うならば、無上の正等覚を得た時になる。迷乱していることについて独りで悟ること（rang sangs）があるかと思うならば、輪廻には辺際がないと知られる通りである。そうであるならば、この輪廻は迷乱しているものであり、苦しみが極めて大きく、またその期間が長く、独りで解脱すること（rang grol）がないのは以上の通りだから、今この時からどうにかして無上正等覚を得ることに努力すべきである。

大乗の実践者にとって、輪廻の入出（輪廻に入ることと、輪廻から出離すること、’khor ba ’jug ldog）は非常に重要なことである。『カダム明灯史』にも「輪廻から出離する心を起こすため輪廻入出の次第を三士の前行として説明してから、小士から〔始まって〕次第に導くようにお書きになったのである。」とある。[12] 輪廻の入出を認識するのは出離の心を起こすためである。輪廻から出離する心が起こらない限り、輪廻から解脱し、最終的な目的地へ至ることができない。それゆえ、最初に輪廻について説明される。まず輪廻し続ける理由と輪廻の災いを知る必要がある。その輪廻の原因は無明であるので、その苦しみは、心を浄化して解脱しない限り永遠に続く。それでは、心を浄化して解脱するにはどうすればいいのか。これ

について以下のように書かれる。

> de ltar ’bad pa la ci dgos zhe na / rgyu dang rten dang rkyen dang ni // thabs dang ’bras bu ’phrin las te // bla med byang chub spyi sdom drug /（中略）rgyu ni bde gshegs snying po ste / rten ni mi lus rin chen mchog / rkyen ni dge ba’i bshes gnyen yin / thabs ni de yi gdams ngag ste / ’bras bu rdzogs sangs rgyas kyi sku / ’phrin las rtog med ’gro don mdzad / ces pa rnams yin no //（TG 2b3-2b5）
> 以上のように努力する場合何が必要であるかと言うならば、因と依り所、縁、方法、果、〔正等覚者の〕事業である。すなわち、無上正等覚の内容は〔、以上の〕六つ〔の項目によって知られる〕。（中略）因としては如来蔵、拠り所としては最上の宝なる人身、縁としては善知識、方法としては善知識の教誨、果としては正等覚者の体、事業としては分別なく有情の利益をなさることである。

輪廻から解脱し無上正等覚を得るために必要な条件と、その果として無上正等覚を得た後の正等覚者について述べられる。その条件としてB1〜B6において、因としての如来蔵、依り所としての宝なる人身、縁としての善知識、方法としての善知識の教誨が必要であるとされ、『解脱荘厳』の構成が明確に示されている。そのうち、本格的な修行の段階はB4「方法としての善知識の教誨」の下位項目として設けている。これらは、順序が多少異なること[13]以外は、『教説次第大論』とほぼ一致する。一つ特徴的なのは、本文の始まりであるB1「因としての如来蔵」、すなわち、「一切有情に仏性がある」という箇所である。これは本稿で取り上げる他の文献では見られない主張である。

以上のような『解脱荘厳』の科段の構成は、『教説次第大論』と『仏説

入門』に似てはいるが、各項目の意味付けについて独自の視点を示していると言える。

5.『牟尼の密意解明』

上述の諸著作と比べ、『牟尼の密意解明』の主題は限定されている。『牟尼の密意解明』は『大乗荘厳経論』第19章の第61偈と62偈に基づいて、悟りへの道の諸段階を設定している。以下は、サキャ・パンディタが引用する『大乗荘厳経論』第19章の第61偈と62偈である。

gotraṃ dharmādhimuktiś ca cittasyotpādanā tathā |
dānādipratipattiś ca nyāmāvakrāntir eva ca || 19.61
satvānāṃ paripākaś ca kṣetrasya ca viśodhanā |
apratiṣṭhitanirvāṇaṃ bodhiḥ śreṣṭhā ca darśanā || 19.62[14]

〔大乗には〕種姓と、法への信解と、また〔菩提への〕発心と、
布施などの〔菩薩〕行と、〔不退転の〕決定性を得ることと、
有情を成長させること、〔仏〕国土の清浄と、
無住処涅槃と、勝れた菩提と〔仏の事業を〕示現すること〔が含まれる〕[15]。

以上の二偈は『大乗荘厳経論』第19章では、大乗を集約するものとして述べられる。すなわち、大乗者による実践の修行とその果（仏地）を得た後の事業の全てがこの二偈に集約されている。サキャ・パンディタはこの二偈を七つの項目に分けている。第61偈 a 句は B1「有縁の基体となる種姓の確定」と B2「帰依」の 2 項目、b 句は B3「発心」、c 句は B4「六波羅蜜の行」、d 句は B5「四摂事の行」の三つの項目に当てられている。第62偈の a・b 句は B6「五道と十地の設定」、c ・d 句は B7「究極の果」に

当てられる。このBの七項目によって、この二偈、すなわち大乗の全てが集約されるとする。以下は『牟尼の密意解明』の科段の構成である。

『牟尼の密意解明』の科段

A1 著作の序論 ［1b1］

A2 本論の内容 ［1b4］

B1 有縁の基体となる種姓の確定（skal ba dang ldan pa'i gzhi rigs nges par bya ba）［2a2］

C1 自性種姓（rang bzhin gyi rigs）［2a2］

C2 随増種姓（rgyas 'gyur gyi rigs）［2a3］

B2 帰依 ［3a3］

C1 帰依そのものの認識 ［2a4］

C2 帰依の本質の決定 ［3a5］

C3 帰依の学処 ［5a1］

C4 そのように学んだ利益 ［8a5］

B3 発心 ［9b2］

C1 声聞の発心（nyan thos kyi sems bskyed）［9b3］

C2 大乗の発心（theg pa chen po'i sems bskyed）［9b3］

B4 六波羅蜜の行 ［16b1］

C1 一般の定義 ［16b3］

C2 分類 ［16b3］

C3 それぞれの語義解釈 ［71b2］

B5 四摂事の行（bsdu dngos bzhi）［71b6］

C1 定義 ［72a1］

C2 分類 ［72a1］

C3 数の決定 ［74a6］

B6 五道と十地の設定（lam lnga dang sa bcu'i rnam gzhag）［74b6］

C1 五道　［74b6］

C2 十地　［89b3］

B7 究極の果（mthar thug gi 'bras bu）［91b2］

C1 正等覚者の定義　［91b6］

C2〔仏〕身の設定（sku'i rnam gzhag）［92a2］

C3〔正等覚者の〕功徳の法（yon tan gyi chos）［94b2］

A3 終わりの内容　［105b1］

『牟尼の密意解明』の大乗の教えはB1「種姓」の説明から始まる。この場合の種姓は大乗者のみの種姓である。B2「帰依」についても、大乗者の帰依が説かれ、次いでB3で大乗の入り口と言われる発心が説かれる。B4「六波羅蜜の行」の下位の科段は、Mの階層まで設定され、そこに対論者に対する批判が展開されている。[16]

こういった『牟尼の密意解明』の著作意図について、サキャ・パンディタは本書の奥書に記された6偈に次のように述べている。

（1）bdag gis thub pa'i dgongs pa ji lta bar / zab dang rgya che'i mdo don legs gzigs pa / rgyal ba'i sras po byams pa'i gsung rab bzhin / 'gro la phan pa'i yid kyis gsal bar byas /（2）spyod pa rgya chen shin tu rgyas pa'i mdo / lta ba'i de nyid shes rab pha rol phyin / mi 'gal gsal bar ston pa kho bo'i gzhung / rigs pas bsgrubs pa bla ma'i gsung bzhin bshad /（3）deng sang shākya thub pa'i bstan pa ni / bud shing zad pa'i me bzhin nyams chung bas / blo ldan skye bo sangs rgyas sgrub 'dod rnams / legs par soms la thub pa'i gsung bzhin zung /（中略）（5）sangs rgyas 'jig rten sgron ma

nub gyur cing / mkhas pa'i skye bo phal cher 'das pas na / blo ngan ma sbyangs gzu lum smra rnams kyis / bde gshegs bstan pa deng sang 'dir dkrugs so / (6) chos 'di log par bshad na sdig pa lci / legs par bshad na skye bo phal cher khro / snyigs ma'i dus kyi chos smra dka' mod kyi / 'on kyang 'gro la phan snyam 'di brtsams so // (TGRS 105b1-5)

(1) 私は、牟尼の真意を〔その〕通りに、深甚と広大なる顕教の教え〔の意味〕を正しくご覧になった弥勒菩薩の聖言に従って、有情に利益する心で明らかにした。(2) 広大なる行である非常に多くの経典と、見解の真実である智慧波羅蜜を、矛盾することなく、はっきり示すものである我が原典を、正理による論証と、上師のお言葉に基づいて説明する。(3) 今日釈迦牟尼の教えは、薪が尽きた火のように力弱くなっているので、悟りを成就したいと思っている知恵ある人々は、正しく考えて牟尼のお言葉通り〔である本書の意味を〕理解してください。(中略) (5) 世間の灯明である仏陀が隠れてしまい、賢者が大部分いなくなってしまったので、悪い心を浄化することなく、偽善を主張する人々が、善逝（仏陀）の教えを、今日こ〔の地〕において混乱させている。(6) この〔仏陀の〕法を誤って説明するならば罪が重く、正しく説明するならば、大部分の人は怒る〔というこの〕末法の時代に〔正しい〕法を説くのは難しいが、しかし、有情に対し利益があるだろうと思い、本書を著したのである。

この偈に、サキャ・パンディタが『牟尼の密意解明』を著した意図が示されている。仏陀の教えがなくなってしまった末世のこの世の中で、仏法が正しく理解されていないので、インドの原典である経典と論書を正しく理解し、その真意を説いた弥勒菩薩の『大乗荘厳経論』に基づいて、仏陀

の真意を明らかにするために本書を書いたとされる。その説明は、混乱した当時のチベット仏教界では快く受け入れられないであろうが、有情の利益のために敢えて正しい仏説を伝えるとも宣言されている。本書が大乗の教えを『大乗荘厳経論』に基づいて説明するという明確な意図があり、全ての仏説を体系的に説明しようとした他の著作とは大きく異なった姿勢であることが分かる。

6．結　語

アティシャに由来する、悟りへの道の階梯を説いた「道次第」と「教説次第」の教えは、アティシャの後継者となるカダム派だけではなく、カギュ派やサキャ派といった他の宗派にも広がり、多数の文献が作られるようになった。14世紀にチベット仏教の道次第を代表するツォンカパの『菩提道次第大論』が出現すると、「道次第・教説次第」の思想は、このツォンカパの著作によって代表されるようになる。一時期、「道次第」と「教説次第」の意味を区別する意見も現れたが、大部分の時代を通じて、それらの二語は区別されずに用いられてきた。

本稿では、そのツォンカパの『菩提道次第大論』が出現する以前の仏教概説に当たる四つの文献を取り上げ、その構成を考察した。そのうち、明確に「教説次第」という言葉をタイトルに含む『教説次第大論』および『仏説入門』はほとんど同じ構成を取り、アティシャ以来の「道次第」の伝統を受け継いでいると言える。一方、『仏説入門』の著者であるパクモドゥパはガムポパの弟子であり、カギュ派に属することから、その師の仏教概説である『解脱荘厳』の影響も見られる。ガムポパの『解脱荘厳』はカダム派の「道次第」とカギュ派の「大印」の教えを統合させたものとされるが、科段の構成およびその意図の説明によれば、科段の項目としては

カダム派の「道次第・教説次第」文献と類似するが、仏教全体を体系的に再構成する視点は、カダム派の伝統のものとは一線を画している。それがミラレパから伝わる「大印」の思想をどのように反映しているかについては、内容を精査した上で明らかにすべきことであり、今後の課題である。最後にサキャ・パンディタの『牟尼の密意解明』は、大乘の教えを主として明らかにするものであり、典拠となる立場は弥勒菩薩作とされる『大乘荘厳経論』の説である点で、他の文献と大きくことなった著作意図の下に書かれたものである。このサキャ・パンディタの『牟尼の密意解明』の明確な著作意図は別にして、他の文献科段の項目には類似したものが見られることから、カダム派の「道次第・教説次第」思想の影響は、カダム派に留まらず、広くチベット仏教全体に影響を与えたと言える。しかし、どのような視点から仏教を体系的に説明するかという視点は、それぞれの宗派によって異なっていると考えられ、これらがアティシャ由来の「道次第」の思想までも受け継ぐものとは言えないように思われる。

略号表

DDG『大乘荘厳経論』*Mahāyānasṃtrālaṃkāra (theg pa chen po mdo sde'i rgyan zhes bya ba'i tshig le'ur byas pa)*, Toh No.4020 (phi 1b-39a).

DJ『信仰入門 』mkhas grub dge legs dpal bzang (1385–1438). *rje btsun bla ma tsong kha ba chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam par thar pa dad pa'i 'jug ngogs*. 青海民族出版社, 1985.

DN『青冊』'gos lo gzhon nu dbal (1392–1481). *deb ther sngon po*. 四川民族出版社, 1984.

KDC『カダム明灯史』las chen kun dga' rgyal mtshan (1432–1506). *bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. 西藏民族出版社, 2003.

KDRC『カダム陽光史』bsod nams lha'i dbang po (1423–1496). *bka' gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nyin mor byed pa'i 'od snang*. BDRC, W23900, pp. 208–393.

KDS『新旧カダム史』paṇ chen bsod nams grags pa (1478–1554). *bka' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan*. BDRC, W23900, pp.

1-205.

KG『学者の宴』dpa' bo gtsug lag phreng ba（1504-1564?）. *chos 'byung mkhas pa'i dga' ston*. 民族出版社, 1986.

LR『菩提道次第大論』tsong kha pa blo bzang grags pa（1357-1419）. *byang chub lam rim che ba*. The Collected Works of rje tsong kha pa blo bzang grags pa (bkar shis lhun po'i par ma), vol. 13 (pa).

MN『ミラレパの伝記』rus pa'i rgyan chan（1452-1507）. *rnal 'byor gyi dbang phyug chen po mi la ras pa'i rnam mgur*. 青海民族出版社. 1981.

STR『仏説入門』phag mo gru pa（1110-1170）. *sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis 'jug pa'i tshul*. The Collected Works of phag mo gru pa rdo rje rgya po (sde dge par ma), vo1. 1 (ka). pp. 228-387.

TKGT『トゥカン一切宗義』thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma（1737-1802）. *thu'u bkwan grub mtha'*. 甘粛民族出版社, 1989.

TG『解脱荘厳』sgam po pa（1079-1153）. *dam chos yid bzhin gyi nor bu thar pa rin po che'i rgyan zhes bya pa theg pa chen po'i bshad pa*. Bhutan.

TGRS『牟尼の密意解明』sa skya kun dga' rgyal mtshan（1182-1251）. *thub pa'i dgongs pa rab gsal*. BDRC, W1CZ1219.

TR『教説次第大論』gro lung pa blo gros 'byung gnas（11世紀半ばから12世紀前半）. *Bde bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rin chen phreng ba zhes bya ba'i rnam par bshad pa*. lha sa ed. A Thousand Books of Wisdom, New York 1998; BDRC, W1PD45157, pp. 1-1048. India, 2001; In *gro lung pa blo gros 'byung gnas kyi gsung chos skor*. bka'gdams dpe dkon gces bsdus（5）. 中国藏学出版社, 2009; BDRC, W1KG24221. Delhi, 2014; *mkhas ba'i dbang po chen po gro lung pas mdzad pa'i bstan rim chen po'i zhabs dum bzhugs so*. BDRC, W1CZ1114.（後半の一部のみ）出版社と出版年不明；『カダム全集』第一集, 第4-5巻.

YKC『ヤルルン・ジョウォの仏教史』yar lung jo bo shākya rin chen sde（14世紀）. *yar lung jo bo'i chos 'byung*. 四川民族出版社. 1988.

文献表

Herbert, V.（1986）*The Jewel Ornament of Liberation by sGam po pa*. Boston.

Jackson, D.（1996）"The bstan rim（Stages of the Doctrine）and Similar Graded Expositions of the Bodhisattva's path." In: J. Cabezón, R. Jackson（eds.）, Tibetan literature: Studies in Genre. Snow lion.

New York, pp. 229-243.
井内真帆　吉水千鶴子編（2011）『トゥカン「一切宗義」カダム派の章』東洋文庫.（『西蔵仏教宗義研究』第 9 巻）.
更藏切主（2019）「ツォンカパ『菩提道次第大論』とドルンパ『教説次第大論』の関連性」『日本西蔵学会々報』第64号（印刷中）.
立川武蔵（1974）『トゥカン「一切宗義」サキャ派の章』『西蔵仏教宗義研究（第一巻）』東洋文庫.
ツルティム・ケサン、藤仲孝司訳（2007）『ガムポパ解脱の宝飾 ： チベット仏教成就者たちの聖典「道次第・解脱荘厳」』星雲社.
長尾雅人（2011）『「大乗荘厳経論」和訳と注解』長尾文庫編, 京都：長尾文庫（長尾雅人研究ノート, 4）.
伏見英俊（2002）「Sa skya paṇḍita の二諦解釈の特徴、並びにその先駆的思想について：Thub pa'i dgongs gsal『般若波羅蜜多章』を中心として」『智山学報』51, pp. 5780.
伏見英俊（2005）「Thub pa'i dgongs gsal に於ける bKa' brgyud 派批判（1）」『関西大学哲学』25, pp. 17-35.
羽田野伯猷（1986）『チベット・インド学集成』第 1 巻 法蔵館.

注

(1)　更藏切主（2019）参照。
(2)　更藏切主（2019）参照。
(3)　『青冊』p. 540,『カダム明灯史』p. 343,『ミラレパの伝記』p. 623,「カダム派の章」井内・吉水（2011）pp. 48-49参照。
(4)　『青冊』p. 655: de dag gi skabs su bka' gdams pa'i dge ba'i bshes gnyen yang gang pa dang / don stengs pa dang / bya yul ba la sogs pa la smon 'jug gi sems bskyed zhus shing bstan pa'i rim pa rnams mnyan / rgya dmar la gsan pa mdzad cing bzhugs pa'i tshe dge bshes phywa pa la sdig bsags pa lo brgyad du 'byang ma nyan gsungs.... // 羽田野（1986）p. 107参照.「カダム派の章」井内・吉水（2011）p. 49参照。
(5)　立川（1974, pp. 58-59）および井内・吉水（2011, p. 50）参照。
(6)　『牟尼の密意解明』が与えた後世への影響について、伏見（2005, pp. 22-23）参照。
(7)　更藏切主（2019）
(8)　更藏切主（2019）
(9)　例えば、ヤルルン・ジョウォ・シャカリェンチェンデ（Yar lung jo bo shākya

rin chen sde. 14世紀）著『ヤルルン・ジョウォの仏教史』において記されているカダム派の章、またカダム派の仏教史として知られるペンチェン・イェシェーツェモ（Pan chen ye shes rtse mo, 1433-?）著『ペンチェン・イェシェーツェモのカダム仏教史』、カダム派とゲルク派の仏教史書として知られるペンチェン・ソナムタクパ（Pan chen bsod nams grags pa, 1478-1554）著『新旧カダム史』にも「道次第」と「教説次第」についての記述が見られない。

⑽ 『カダム陽光史』88b2-6: tshogs su ’chad na bstan pa’i rim pa / nyams len du dril ba lam gyi rim pa / gzhung du bkod pa byang chub lam gyi sgron ma ste don gcig la ming gsum btags pa dang ’dra gsung ba dang /...（省略）

⑾ 本稿に取り上げる『教説次第大論』と『仏説入門』、『牟尼の密意解明』、『解脱荘厳』の科段の番号は暫定的なものである。

⑿ 『カダム明灯史』p. 19 ’khor ba la nges ’byung bskyed pa’i ched du ’khor ba ’jug ldog gi rim pa skyes bu gsum ka’i sngon ’gror spyir bshad nas / skyes bu chung ngu nas rim gyis ’khrid par mdzad pa yin no //

⒀ 『解脱荘厳』と『仏説入門』における道の順序が『教説次第大論』と異なる理由については、今後の課題としたい。

⒁ チベット語訳（第20章）は以下の通りである。(20.61) rigs dang chos la mos pa dang // de bzhin du ni sems bskyed dang // sbyin la sogs pa bsgrub pa dang // skyon med pa la ’jug nyid dang //（20.62）sems can rnams yongs smin byed dang // zhing ni rnam par sbyong pa dang // mi gnas mya ngan ’das pa dang // byang chub mchog dang ston pa’o //（DD 35a5-6）

⒂ 日本語訳は長尾（2011）を参考にした。

⒃ この点について、伏見氏による研究がある（2002；2005）。同論文は、『牟尼の密意解明』における智慧波羅蜜章を基本資料とし、サキャ・パンディタの二諦解釈について分析するものである（pp. 57-68）。そして、『牟尼の密意解明』における対論者への論争は８世紀の吐蕃時代まで遡れることからサキャ・パンディタによる学説批判は正統なインド仏教の伝統とそうではない非正統な邪説を識別すべき点から始まり、その批判方法としてはサキャ・パンディタの独断ではなく、インド以来の学説原理に基づくものであると指摘する。